

## 27. 千葉県こども病院 HBO 治療における 付き添いの現況

佐々木章\*<sup>1)</sup> 江東孝夫\*<sup>2)</sup> 坂元英雄\*<sup>1)</sup>

{<sup>\*1)</sup>千葉県こども病院 ME }  
{<sup>\*2)</sup> 同 外科 }

【目的】小児に対する HBO 治療では安全かつ有効に治療を行うため、タンク内での付き添いが必要である。そこで当院における付き添いの現状とその役割について検討した。

【方法】装置は小型第二種装置 (KHO-300S) を使用した。対象は、'90年6月より'94年6月までの4年間とし、79患児のべ126症例に816回の HBO 治療を行った。タンク内での治療は原則として医師、看護婦、親、のいずれかが必ず付き添うものとし、以下に上げる付き添い者による治療回数と内容について検索した。1、医師と看護婦。2、医師。3、看護婦。4、親。ただし、親だけの付き添いは原則として軽症例の学童以上とした。

【結果】1、医師と看護婦による付き添いは5患児に対し延べ12回 (1.5%) 行われた。多くは未熟児及び新生児での生命維持管理を必要とする症例で、いずれも緊急を要する重症患児であった。2、医師による付き添いは107回 (13.1%) で、初回治療時に多く見られた。2、看護婦の付き添いはモニタリングや吸引その他の処置が必要と考えられる場合で、348回 (42.6%)。3、親のみの場合は、軽症例かつタンク内における処置を必要としない場合で、350回 (42.8%)。その時の年齢分布は、乳児27回 (7.7%)、幼児143回 (40.8%)、学童以上は180回 (51.4%) であった。また、付き添い者の負担や患児の治療に対する不安を取り除くため、昨年よりビデオプロジェクターを導入し、主に幼児以上の患児に対し効果を上げている。

【まとめ】未熟児から学童まで様々な年齢及び重症度を有する患児への HBO 加療において、その患児に見合った職種の付き添いを選ぶことが、安全で有効な治療のための重要な要素と考えられた。

## 28. 救命センターにおける高気圧酸素療法 の現況と治療効果の検討

小杉 隆 千代孝夫 田中孝也

(関西医科大学救命救急センター)

【目的】高気圧酸素療法 (OHP) の適応症例は、一酸化炭素中毒、イレウス、脳血管障害、敗血症、熱傷、ガス壊疽、突発性難聴など広範囲にわたり、救急領域においても必須の治療手段とされている。今回、我々が有効な治療法として積極的に行っている頸髄損傷症例を含めてこれらの OHP の施行状況とその治療効果について検討を行ったので報告する。

【方法】対象は、1992年4月から1994年6月までの間の、32症例 (男性27人、女性5人) で、その内訳は、頸髄損傷17例、突発性難聴3例、一酸化炭素中毒2例、腹膜炎手術後1例、ガス壊疽2例、潜水病1例、頭部外傷4例、硬膜下血腫手術後リハビリ2例であった。以上の症例に対して OHP 施行前後での改善度について検討した。

【結果】①頸髄損傷では大部分の患者で運動能力の改善があり、歩行可能となるケースもみられた。②突発性難聴では発症後早期に OHP を行った患者で難聴が改善された。③一酸化炭素中毒では CO へモグロビン濃度の低下がみられた。④頭部外傷例のリハビリでは OHP 施行後食欲亢進や意識レベルの改善がみられた。⑤頭部外傷では一時的な効果は認められるものの著明な改善をみた例は少なかった。

【考察】多くの症例に早期の OHP 施行により改善がみられたことや、当センターの高気圧酸素装置が人工呼吸器や、輸液、心電モニターが可能であることから救急症例にも施行可能であり、これからの積極的に本法による治療を行っていきたい。